



## 市読書感想文コンクール 市長賞受賞作品紹介

毎年開催している市読書感想文コンクールは、今回で50回目を迎えました。市内の小・中・高等学校から寄せられた80編のうち、本号では市長賞を受賞した作品を紹介します。



### ★小学校中学年の部

「ポリぶくろ一まいすてた」を読んで  
益田小学校4年 横内 千明さん

この物語は、ガンビアのンジャウという町でアイサトという女の人が町にすてられたポリぶくろでさいふを作るお話です。この町では、村の人たちが青や黒のポリぶくろで買い物をしたり、子どもたちはとうめいなポリぶくろにジュースを入れて使ったりしていました。そしてやぶれたポリぶくろは道にすてられていました。アイサトはきれいだと思って始めは使っていました。ポリぶくろがたくさん落ちてくるきたない道をアイサトは歩かなくなりました。

私が心に残った場面は、ヤギがポリぶくろを食べて、町中のヤギが死んでしまった時にアイサトが町みんなのために何とかしなければと強く思った場面です。アイサトは、道いっぱい広がつたポリぶくろを見て、自分に何が出来るか一生存命考え、おさいふを作ることになりました。私ならゴミひろいをして、ポリぶくろをすてるためのゴミ箱を作るアイディアはうかぶけど、おさいふを作るアイディアはうかばないと思います。だれもやらないことを一番始めに実行したアイサトは勇気のある人だと思います。

アイサトはゴミの山からポリぶくろを取り出し一まい一まいあらいました。そして、友達とポリぶくろのさいふを作

り始めました。アイサトは、あみ方を妹から教えてもらいました。手にまめができましたが、自分はいいことをやっていると思っていて毎日あみ続けました。アイサトはできたさいふを市場に売りに行きました。そのさいふがたくさん売れているのを知り、私は「アイサトやったね」と思ったし、アイサトもゴミから人に喜んでもらえるものを作って満足していたと思います。それに、さいふを売ったお金からヤギを一びき買えるようになって、ゴミの山が小さくなったので、町も昔のようにきれいになると思います。

前に、ウミガメがクラゲとまちがえて、ポリぶくろを食べてしまつて、死んでしまった話を聞いたことがあります。だから、ヤギもポリぶくろをまちがえて食べてときは苦しかったと思います。生き物がまちがってゴミを食べてしまつと生き物がへつてしまいます。生き物がへつてしまつとせたいけいなくずれて人間も生きることができなくなつてしまいます。

本を読んでから、私もポリぶくろを使ってコースターを作ってみました。ポリぶくろを切る時、大きさがバラバラになつてしまつし、糸があむ時よりかぎばりを通してにくかつたです。ポリぶくろをへらすために、マイバッグを買い物の時に持って行きます。前は持って行かない時もあったけど、今は買い物の時は、いつも持つて行くようにしています。これから、ゴミをへらすために私もリサイクル

ルにもちようせんしてみたいと思います。この本を読んで、私もアイサトみたいにみんなのためにいいことは自分からできる人になりたいです。

※読んだ本

「ポリぶくろ、一まい、すてた」

ミランダ・ポール(さ・え・ら書房)

### ★小学校高学年の部

飛ぶための百歩

戸田小学校6年 齋藤 来羽さん

見えないって、どんな感じなんだろう。私は目が見えるけど、目が見えないって、すごく不自由なんじゃないかなと思います。でもルーチョは、運動も音楽も、本を読むことも大好きと言っていて、私はとても驚きました。山の中を歩くこともできるなんて、信じられませんが、ルーチョは目が見えなくなつてから、耳や手など、目以外の感覚を感じる人よりもたくさん使いながら、あらゆることに立ち向かう方法を見つけていったのです。私は目が見えているけれど、体の感覚をどれだけ使えているだろうかと考えました。花のおいをかいたり、音楽を聴いたり、水の中を泳いだり、これまで気が付かなかつたけれど、見る以外にも感じるものってたくさんあるんだなと思いました。

私は、生まれたときに病気にかかって手術をしています。今でも、走ると息切れがして速く走れなかったり、バレエを踊るのに最後まで体力が続かなかったりします。そんな時先生や家族が応援してくれたり教えてくれたりするけれど、悔しくて涙が出て、なかなか素直に聞くことができません。ルーチョやキアラが素直になれない気持ち私にも分かりました。

でも、山登りを通してルーチョは変わっていききました。初めは「何でも自分でする」と、素直になれずに苦しんでいたけれど、周りの人たちに支えられ、少しずつ心を開いていきます。ワシの赤ちゃんが密猟者にさらわれた時には、私まで不安でドキドキしました。仲間のピンチに、ルーチョが得意のクラスの鳴きまねやよく聞こえる耳を使って活躍した場面は最高でした。ルーチョたちがそれぞれに自分でできることをして、力を合わせているところがとてもかっこよく感じました。ルーチョたちを見ていて、素直になることは、周りの人だけでなく自分にとってもすごく良いことなんだと分かりました。私もすぐに「自分でできる」と意固地になつてしまうけれど、できないことや困ったことがあってもいい、人に頼ってもいいんだ、と思えるようになりました。

「飛ぶための百歩」。初めてこの題名を見たとき、鳥が出てくるお話なのかなと思っていました。読み終わった今、そ

の意味が分かったような気がします。

「飛ぶ」とは、ひな鳥が大人の鳥になって飛ばたいていくように、ルーチョや私たちが成長していくことをいつているのではないかと思います。誰かに頼ったりみんなと協力したりしながら一歩一歩を歩いていくことが、きっと「飛ぶための百歩」になるのだと思いました。

私は今年の運動会で色組の組長になりました。組長のだから何でも私がやらなければと感じていたけれど、ルーチョのようにもつとみんなに心を開いて、仲間を頼ってやってみようと思えます。いつか大空を飛ばたくその日に向かって、「飛ぶための百歩」を私も歩んでいます。

※読んだ本「飛ぶための百歩」  
ジュゼッペ・フェスタ (岩崎書店)



## ★中学校の部

一つしかない友愛数

高津中学校1年 篠原 優作さん

ぼくは、中学に入り、たくさんの数式に出会いました。ある日、数学の宿題をしながらふと本棚を見ると、背表紙に「数式」と書かれた小説が目に入りました。そこでぼくは興味を持ち、その本を手に取りました。数式という言葉に、正直難しいイメージを強く持っていたぼくでしたが、あらすじに書いてあった「ぼくの記憶は八十分しかもたない」というフレーズに心をひかれました。

多くの読んだ小説は、「博士の愛した数式」です。登場人物の博士は、二十五年前に交通事故にあい、四十七才で記憶は止まってしまいました。その事故以来、新しくできた思い出も、八十分たつたら消えてしまいます。そんな博士のもとに、お手伝いとしてやってきたのが、主人公の家政婦さんと、その息子でした。

「八十分の記憶」というのが、博士に与えられた時間でした。八十分と聞いて、ぼくはとても短い時間だなと感じます。なぜなら、学校の授業は一時限が五十分です。記憶が八十分で消えるということは、二時間目の授業を受けるときには、一時間目の記憶や、習った内容も忘れてしまうということです。ぼくはそんな博士と家政婦さんたちの繰り広げるストーリーに、どんどんひきこまれて

いきました。

ぼくが一番好きな場面は、博士が家政婦さんに数式の話をするところです。博士の腕時計には、284という数字が刻まれています。そして、家政婦さんの誕生日は二月二十日で220という数字で表せます。284の284を含まない約数を全て足すと220になります。284の284を含まない約数を全て足すと220になり、220の220を含まない約数を全て足すと、284になります。これは何かというと、博士が愛してやまない「友愛数」という数式です。これはめったにない組み合わせで、世界で一つしか見つかっていません。神の計らいを受けたとしか思えない、284と220の数字はとても美しく、静けさすら感じました。このことを知り、ぼくは数学の授業で数のしくみを教えてもらうことが楽しくなりました。

例えば、ぼくの身近な数字として思いつくものをあげてみました。一つは、中学校でのサッカーのユニフォームの背番号36。二つ目は、小学校で着ていたユニフォームの背番号55。この二つの数字を比較してみました。すると、奇跡が起きてしまったのです。なんと、36の36を含めない約数の和が、55になってしまったのです。ぼくはびっくりしすぎて言葉が出ませんでした。たまたま見つけてしまったこの組み合わせを忘れないように、自分の名前をつけ、「ユウサク数」と呼ぶことにしました。誰も知らない、ぼくだけの数式として、この二つの数字

を大切にしていきたいです。数には、ほどの知らない世界が無限に広がっていると感じる出来事でした。

さらに興味深い数字は、「完全数」です。博士が好きな野球選手の背番号は28で、「28はとても美しい数字だ」と博士は言っていました。完全数とは、その数自身を含まない約数を全て足したとき、その和がその数自身になるものことです。28の他にどんな数字があるのか調べてみました。完全数の最初の三個は、6と28と496であることが分かりました。そして完全数がどれだけあるかという探究が二五〇〇年以上前から現在まで続けられていることも知りました。完全数は博士の言うとおりとても美しいと感じました。また数式は大昔から研究されているのにまだ全て分からないというところから数の世界は奥が深いと感じました。

ぼくはこの本を読み、友愛数で結ばれている博士と家政婦さん、そしてその息子は、目に見えない絆で結ばれていると感じました。八十分という限られた時間の中で、家政婦さんと息子は、いつも博士が傷つかないようにふるまっています。八十分後にはすべてを忘れてしまうけれど、それでも博士を傷つけないように努力するところに、とても感動しました。

二人が博士の「記憶」に残ることは絶対ありません。しかし、博士の「心」に残る存在として生きていたいという

二人の思いに、ぼくは心が温かくなりました。

この本を読んで、数式のおもしろさひきこまれる博士と、一緒になってわくわくし、その周りの人々の、切なく温かい愛を感じることができました。また、この本に出会ってほくだけの「ユウサク数」を発見できたことで、数式の美しさを今以上に感じる事ができました。無限に広がり、優しく静かにたたずむ「数」の中で、「友愛数」ならぬ「ユウサク数」は、どの人にも存在する、世界にたった一つだけの数式なのかもしれません。

※読んだ本「博士の愛した数式」

小川 洋子（新潮社）

### ★高等学校の部

愛と夢のある世界で

益田高等学校1年 森 叶圭さん

私と、おなじだ……。身体の奥が震えたのは気のせいだろうか。私は唾を呑み込んで、より一層、本に意識を集中させた。

世界中、多くの人が日々愛や夢を持って生きている。その沢山の愛と夢に埋もれた一人、私の愛は音楽にある。そして私の夢はシンガーソングライターになることだ。

昭和十二年、十六歳の佐倉ハツは、西

洋音楽の私塾に内弟子として通いながら、歌手を夢みていた。私は、自分とおなじ夢を持つハツにとっても親しみを感じた。夢がおなじだというだけで、時折まるで自分を見ているような錯覚に陥りながら読み進めていった。ハツは、音楽を好きな気持ちなら誰よりも強いという自信を持っていた。そしてそれと同じくらい、その頃少女たちに絶大な人気を誇っていた少女雑誌「乙女の友」を愛していた。

ある時、そんなハツにチャンスが訪れる。ハツの堂々とした歌声を称賛し、歌の仕事を紹介すると言う人が現れたのだ。私は胸が高鳴るのを感じた。夢が叶ってほしいと願った。ハツは期待を膨らませたが、現実には決して甘くなかった。歌の仕事の代価に、妾になれと言ってきたのだ。ハツの前に釣り下げられた糸は、危険でいつ切れてもおかしくない、頼りないものだった。歌で生きていくことがどれだけ厳しいか、私は十分知っている。それでもこのハツの身に起きた事が私は悔しかった。本気で追っていた夢を軽んじられ、怖い思いをしてまで奪われる気持ちを、辛い一言で表していいだろうか。私は、夢を追うために、叶えたいだろうか。どんなに犠牲を払えるつもりでいたのだろうか。興奮は呆気なく冷えて、取り留めのない重苦しさが私の背中を覆った。

その後、歌をやめどこへ行くの？と思

い悩んでいたハツに、親戚のおじさんが「乙女の友」の主筆である有賀憲一郎の小間使いの仕事を持ち掛けてきた。が、時代は戦争真っ只中である。ハツは雑誌社史上最も過酷だったときに右も左も分からぬ状態で飛び込んでしまった、と言っても過言ではないだろう。私だっただけで行けるかどうか分からないくらい目まぐるしい毎日でも、ハツは決して諦めることなく走り続けた。一度砕けたところから新たな夢を抱くようになっていく姿には、私たちに希望を与えてくれる強い灯があった。私は、ハツやその周りの人達の情熱から、シンガーソングライターという表現者を目指す人間として大切なことを沢山教わった。

この本に出逢わなければ、こんなに表現の自由が奪われていた時代があったことを知らないままだったかもしれない。今まで当たり前だと思っていたことがそうではなかったと知ったとき、私は衝撃と憤りを感じた。戦時中、時局が悪くなると、雑誌の検閲が厳しく行われるようになった。絵や文が華美だったり外国趣味だったりすると警告が出される。「現実から目をそむけて、抒情的なものに溺れるのは読者の心を脆弱にする」と。色々な考え方があって当然だが、私にはこの言葉が引っかかり、納得できなかった。雑誌や絵、詩といった抒情的な芸術は、むしろ心を強くすると信じてきたからだ。多くの人は、そういうものから勇気や希望をもらった経験

があるのではないだろうか。私も、生きる活力を与えてくれた作品に、これまで沢山出逢ってきた。心の支えとなるものが消えてしまったのは、戦争で荒んだ心はますます脆弱化するだろう。それに、私もやっっているソングライティングなんて、正に抒情的なことではないか。シヨックを受けたのと同時に、自分の感情を述べ表すことが当たり前のようにできるのが、どれだけ幸せであるか思い知った。そして、戦争ではないけれど、世界が見えない敵とたたかっているこの時に、この本と出逢えたことは大きな意味があると感じた。日常を逸脱した日常が当たり前前の絶望的な世の中になってしまっている、気持ちが沈むことが多くなった。表現の場を奪われたアーティストも沢山いる。しかし、有賀はこう言っていた。「絶望と希望は紙一重。」だと。本当にそうかもしれない。仲間と楽しむことも、直接届けることも難しい、こんな世の中のすぐ反対側には、創意工夫で乗り越えようとしている人達の存在。思いを放ち綴ることを妨げる圧力などない。そんな希望が、たしかにあった。

楽しみに待っている「友」のため、厳しい検閲、苦しい資料不足、激しい戦争を乗り越え雑誌を作り続けた表現者たち。そういう人たちのおかげで、今の日本の芸術があるのだということに感謝し、伝えていきたいと思った。そして、物語の中で文章のみの描写だったにも関わらず、色を纏って私の脳裏に鮮明に焼

き付いた長谷川純司の抒情画のように、時代を越えても永遠に褪せないようなうたを、いつか紡いでいきたい。この物語と、ハツや有賀、純司たちに出逢えた喜びを忘れはしないだろう。愛と夢のある世界で、「彼方の友」を信じ、私も想いを届ける一人になりたい。

※読んだ本「彼方の友へ」

伊吹 有喜(実業之日本社)



## 益田市教育委員会からのお知らせ

# 「益田市部活動指導者バンク」へ登録をお願いします

(益田市の部活動に関わってみませんか)

益田市では地域の皆さんの力を生かしていただくために「益田市部活動指導者バンク」への登録をお願いしています。

- ◎ 小学校・中学校どちらの部活動も対象とします。
- ◎ 文化部・運動部どちらも受け付けます。
- ◎ 学校と相談し、都合に合わせて期日や時間を決めることができます。

※登録票は、各公民館、各小学校、各中学校にあります。

### ★市内の部活動(令和2年度現在)

小学校	体操、自転車、サッカー、陸上・駅伝、相撲、バスケット、ティボール、かるた、吹奏楽、合唱
中学校	女子バレー、野球、サッカー、陸上・駅伝、バスケット、ソフトテニス、卓球、剣道、柔道、美術、科学、吹奏楽、箏、神楽



【問い合わせ先】市学校教育課 ☎ 31-0445